

文教大学湘南キャンパスに於ける英語教育の展望

高橋雅人・ジュリアンバンフォード

Current Issues in English Education at Bunkyo University Shonan Campus

Masato Takahashi, Julian Bamford

Abstract

The current government initiative on English education has reached the stage of specific directives, including some for universities. We believe that the 2003 Ministry of Education Action Plan to Cultivate Japanese with English Abilities, and the 2004 Tokyo Forum on the same subject, can give guidance to those of us responsible for English education and the English ability of students at Bunkyo University. Part 1 of this article summarizes aspects of the 2003 Action Plan relevant to universities. Part 2 reports aspects of the 2004 Forum related to English skills desired by Japanese companies. Part 3 contains our suggestions for how the Ministry directives and employer needs might be successfully addressed at Bunkyo University Shonan Campus. (To reflect the conclusions of this article, it is presented here in both English and Japanese.)

“For children living in the 21st century, it is essential for them to acquire communication abilities in English as a common international language.” Toyama Atsuko, Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, March 31, 2003

要 約

大学を含む英語教育についての政府の計画は具体的な方向性を帯びてきている。文部科学省の「英語が使える日本人」の育成のための行動計画（平成15年3月31日）と平成16年3月に開かれた「英語が使える日本人」の育成のための行動計画東京フォーラムは文教大学での英語教育と学生の英語能力に関係し責任を負う教職員にとって手引き、方向性を示すものと言える。パート1では2003「英語が使える日本人」の育成のための行動計画の中から大学に関する考察、パート2では日本企業からの大学生の英語能力についての要望、パート3では我々の考える文部科学省の指針と企業からの要望に成功裏に応えるための提案をする。（本論文の結論を反映させるために英語と日本語の両言語で発表する。）

「21世紀を生きる子供達にとって、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要である。」

平成15年3月31日 文部科学大臣 遠山敦子

はじめに：文教大学は語学教育のパイオニアになれるか？

時代は動いている。現代社会は実践的コミュニケーションとしての語学能力を要求、必要とし、文部科学省はこの要望に応えるべき方策を模索している。しかし、現実には「英語が使える日本人」の育成に具体的にどのようにアプローチし達成していくかについては多くの不確定な要素があるように思われる。例えば、「英語に関して実践的、コミュニケーション」とはどのような意味なのか？私達筆者の定義は「辞書を使って一語一語時間をかけ難解な英文を日本語に訳すること」ではなく、「自分の感情や意見をリアルタイムで話し又は書いて表現できる能力であり、他者の話す言葉や本などの書かれた言葉を辞書などを使用せずに直接に理解する」ことである。

今、文教大学湘南キャンパスが大学語学教育のパイオニアとなる大きなチャンスがあります。文部科学省による財政支援策（総合的教育取組支援、「特色ある大学教育支援プログラム」や現代的課題等取組支援「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」）（フットノート1）もあります。湘南キャンパスを効率的かつ実践的な英語学習環境へと変換可能であるならば、それは文教大学湘南キャンパスが高等教育機関としてより力強く、そして特色あるキャンパスへと変貌することになるでしょう。文教大学湘南キャンパスが大学語学教育のパイオニアになるためには何が必要なのでしょう？以下にまず文部科学省の指針と企業からの具体的な新卒生が持つべき英語能力について述べ、そして私達の幾つかの提案を述べます。

パート1：平成15年文部科学省の「英語が使える日本人」の育成のための行動計画の中から大学に関する項目（フットノート2）

大学に関する文部科学省の計画には以下の三つの側面が含まれる。

1. 大学卒業時での能力設定
2. 入学者選抜試験
3. 大学英語教育への実践的研究

1. 大学卒業時での能力設定

「英語が使える日本人」の育成のための行動計画では高等学校卒業段階で「日常的な話題について通常のコミュニケーションができる」ことを国民に求めています。これは英検準2級～2級程度のレベルです。大学卒業時については「大学を卒業したら仕事で英語が使える」というだけで具体的な達成目標は述べられずに「各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定」となっている。

2. 入学者選抜試験

大学は入学者選抜試験での英語における評価方法の改善を求められている。大学に於ける入学者選

抜試験は、中等学校及び高等学校等の英語教育の方法や学習者の学習意欲や要望に強く影響を与えることを認識し配慮した上での改善を求められている。コミュニケーション能力、リスニング能力とスピーキング能力を含む、等が適切に評価されなければならないと「英語が使える日本人」の育成のための行動計画では記されている。各大学が設定する英語力の達成目標などをもとに、入学者選抜試験受験者に求める英語力を明確にする。特にリスニングテストの導入、または英検やTOEFL、TOEIC、ケンブリッジ大学英語検定試験などの各種外部検定試験の一層の活用を求められている。

3. 大学英語教育への実践的研究

大学に於ける英語教育に関する実践的研究、特に、仕事に関する英語教育に関する具体的なモデル事例が奨励されている。「モデル事例は教科内容の改善や大学間の協力体制の構築、大学教員養成の在り方等について扱う。」となっている。

以上の「英語が使える日本人」の育成のための行動計画中の大学に関連する三つの事柄から一番最初に各大学を取り組まなければならないことは卒業時点での英語力の達成目標を設定することと思われる。

平成16年3月に開かれた「英語が使える日本人」の育成のための行動計画東京フォーラムは文教大学湘南キャンパスにとって大切ないくつかのインフォメーションがあった。

パート2：2004「英語が使える日本人」の育成のための行動計画東京フォーラムと大学卒業時に持つべき英語能力

平成16年3月28日に行われたフォーラムの中で企業が求める新卒生の英語能力についての具体的な提示があった。

日本アイ・ビー・エム株式会社（以下日本IBMと記す）代表取締役会長北城恪太郎氏は基調演説の中で日本IBM社員の英語能力について話をした。日本IBMでは英語で書かれた書類や本などを読むために英語でのリーディング能力と電子メールでのやりとり等のための英語でのライティング能力は必要である。しかし、リーディング能力やライティング能力以上に必要とされる能力は自分の考えをスムーズに表現することのできる英語でのスピーキング能力である。日本IBMでは入社試験にTOEICテストを採用している。平成16年3月までの入社試験でのTOEICテスト受験者の平均点は630点（34%の受験者が630点以下、66%の受験者が630点以上）となっている。

また北城氏は次のような興味深い経験談を述べた。中国のアイ・ビー・エムを訪れたときに中国人社員の英語が日本IBM社員の英語より優れていることに気づき、中国人社員に一体どこで英語を習得したのかと尋ねると、「私達は中国国内だけで英語をマスターしました。海外留学など一度もしたことがありません。」という予想もしなかった答えにとっても驚いたとのこと。

そして企業からのパネリストによる大学卒業生の英語能力に関するプレゼンテーション並びに質疑応答が行われました。現在、英語はビジネスの世界では世界共通語。パネリスト達は口を揃えて英語は全ての大学卒業生にとって必要不可欠となっている現状を言明。ワールドワイドな大企業に多くの卒業生を輩出しているような大学に属している学生だけではなく、国内活動がメインの企業に就職す

る学生にとっても英語は必要なツールの一つになっている。その理由は現在のインターネットなどを利用したビジネスの展開から、英語でのコミュニケーションができないイコール企業にとって大きなビジネスチャンスを失うことを意味するからである。

日本IBM代表取締役会長北城恪太郎氏が示したように、多くのパネリストがTOEICテストを指標に推奨した。そしてTOEIC600点を新社会人として新たに入社してくる大学を卒業した人達の目標と掲げている。海外への出張や業務に携わりたい者はTOEIC730点の一つの指標となると示唆。

しかし、パネリスト達はTOEICテストの点数だけが英語能力の全てではないと強く指摘。彼らの企業に入社してくるTOEICテスト高得点の多くの新卒生達は自分の意見を英語で表現できるまでに至らない、またはスムーズな英語での表現ができない傾向にある。企業にとって理想的な人材はTOEICテスト高得点を保有し尚且つその得点に見合うだけの英語での自己表現の流暢さを兼ね備えた人間である。このことから富士通株式会社では入社試験の際にTOEICテストにスピーキングテストを加えたものを実施している。

以上のことから大学英語教育の姿と達成目標値は明白である。大学での英語教育は第一にスピーキングを中心としたオーラルコミュニケーション力を伸ばし英語による自己表現に対する自信を深めることを主眼に置き、まずはTOEIC600点とその数字に裏づけされる英語でのコミュニケーション力をつけることが目標になるべきであろう。その中でも大学入学時にすでに将来海外で仕事をする、留学をする等の目標がある学生にはTOEIC730点の目標設定が相応しいと思われる。そして北城氏の中国での経験談からこれらの目標達成には海外留学をせず国内での学習だけで達成することが可能であることを示唆している。

以上のことは文教大学湘南キャンパスで英語能力の達成目的値を設定し、その為のプランを策定して初めて我がキャンパスにとって有用な情報となる。

パート3：文教大学湘南キャンパスに於ける英語学習

「英語が使える日本人」の育成のための行動計画と2004「英語が使える日本人」の育成のための行動計画東京フォーラム（以下2004東京フォーラムと記す）から英語教育に関して多くの方向性が見出せることができるが、以下は私達筆者の結論である。

1. 英語を知識とではなくスキルとして捉えなければならない

文部科学省は各大学に学生が仕事で英語を使えるようになるために準備させることを要望している。これは日本IBMの北城恪太郎氏が示すように英語を話す能力であり、自分のアイデアを英語で表現できる能力である。そこで、私達は文教大学湘南キャンパスのすべての英語クラスはこの能力開発に集中すべきであると考えている。

一部のTOEIC730点又はそれ以上の英語能力を目標にしている学生にのみ英語で書かれた文書、本などのためのリーディングやビジネスシーンでの電子メールを英語で書く等のライティングが教えられるべきである。そしてTOEIC730点又はそれ以上の英語能力が目標のクラスでは、英語の語句一語一語を辞書等を使用して日本語に翻訳してから理解するようなスキルではなく、英語を英語としてダイレクトに和訳なしに理解し扱うことができるようになることを目標にするべきである。

実践的なオーラルコミュニケーション能力を向上させるために、学生はただ話すだけでなく聴くというトレーニングも必要となる。そして、スムーズな英語でのコミュニケーションには2000語程度の

英語の基本的な語彙のマスターも必要となる。しかし、学生は単語リストから機械的に単語の意味だけを覚えるのではなく、より自然なコミュニケーション状況下で基本的な語彙と、実践的な本当のコミュニケーションの場を通じ遭遇すべきである。これはただ単に英語を母国語とする英語講師たちとのコミュニケーションだけではなく、英語を母国語としない講師とまたは学生、学習者同士での英語を使用したクラス内とクラス外でのコミュニケーションの場で実際に言葉を使いながら語彙学習をしていくべきである。このような方法により学生を暗記や忘れてはならないというストレスから開放し、より円滑な学習効果が期待できる。

2. 我々に合った達成目標の設定

文部科学省は各大学が独自の目標値を設定することを要望している。文教大学生の就職企業の現状や先に述べたフォーラムでのパネリストからの意見を考慮すれば、文教大学を卒業する学生はTOEICテストでの600点に相当する英語コミュニケーション能力を身につけるべきである。そしてやる気のある学生はTOEICテスト730点に相当する英語コミュニケーション能力を身につけるべきであろう。これらの目標値は決して短期間で達成されるものではなく、学生と教える側の人間はTOEICテストでの600点とは長い年月英語に携わった自然の結果であり、基本的な英語コミュニケーション能力を徐々に習得した結果であると理解し心得るべきである。

3. 英語コミュニケーション能力であり、テストの点数ではない

先に述べた2004東京フォーラムでのパネリストが明らかにしたようにTOEICテストの点数だけでは十分ではありません。TOEICテストの点数を反映した英語能力こそ企業が求めているものです。そこで、文教大学湘南キャンパスではTOEICテストそのものを教えることや、学生に点数アップだけを望むことはあってはならないと考える。我々はTOEICテストを一つのゲージ、指標にすぎないと認識すべきである。文教大学湘南キャンパスでの英語クラスは英語コミュニケーションと基本語彙の習得に焦点があてられるべきであり、TOEICテスト対策クラスなどは存在すべきでないと思われる。

4. カリキュラム外での英語学習についての研究とキャンパスライフの英語化

十分な語彙を伴う英語コミュニケーション能力の発達には何百、何千時間という時間がかかるという現実を考慮すると、ただ英語の授業に行けば学生はこの能力を向上させることができるということではないように思われる。そして、学生は一人一人個性を持ち、異なることに興味を抱き(コンピューター、ゲーム、旅行、テレビ、映画、音楽、スポーツ、ジャーナリズム、世界事情、ファッションなど)学習スタイルも各々違うものを持っている。この現実に対応する為に、文教大学湘南キャンパスはカリキュラム外、正規の英語クラス外での学生の英語コミュニケーション能力向上を奨励し且つアシストするバラエティに富む様々な設備、施設を備えるべきである。

例えば学生が湘南キャンパスに到着すると、そこには英語があるのです。キャンパスのありとあらゆるところに英語が偏在し、いつでも英語を手に入れ、利用でき、そしてそれは楽しい、という英語学習環境。そこは魅力的な英語コミュニケーション能力学習教材が溢れている。本、テープ、クラス、質問に対する答え、これらのすべてが容易にアクセスでき、簡単に使いこなすことができる。どのように英語コミュニケーション能力を方法がわからない学生のために学習カウンセラーも存在すべきである。学生同士が英語で会話のできる場所も存在すべきである。

そして英語が湘南キャンパスで日常的に使われる言語の一つとなるべきである。湘南キャンパスが

掲示板や看板、サイン等からバイリンガルな環境となれば、文教大学湘南キャンパスに通う学生は英語とコンタクトせずには生活できない、英語コミュニケーション能力の習得に失敗できない環境となる。学生は特別な努力もなしに無意識に英語を使い、練習し、英語に対しての自信を深める。そのとき英語はもはや授業や就職に必要なアイテムではなく学生の周りに常に存在する空気のようなものとなる。

文部科学省は効果的で実践的な英語教育の研究を推奨しサポートしている。現在までカリキュラム外での英語学習についての研究は多く存在しません。私達は文教大学湘南キャンパスがこのフィールドについての研究費補助に応募すべきだと考えます。

5. 入学試験改革

「英語が使える日本人」の育成のための行動計画の中で推奨されているとおりに、文教大学も入学選抜試験受験者のTOEICテスト、TOEFLテスト、英検などのスコア等を入学選考の一部に使うことを始めるべきである。しかし単純なこれらのテストの結果からの英語力判断は避けるべきである。TOEICテストやTOEFLテストの場合は複数回でのテストの結果の推移から英語能力のみを判断するだけでなく、英語能力の変化や学習に対する積極性などの多角的な判断を用いるべきである。この際にリスニング部門のテストスコアをより重視すべきである。これはリスニングテストがリーディングなどのテストスコアより実際の英語コミュニケーション能力を反映するからである。そしてスピーキングテストなども積極的に導入することにより従来型の詰め込み式の受験勉強から子供たちを解放することができるものと思われる。

そして私達は文教大学が新しい包括的リスニングテストの研究をすることを提案する。この新しいリスニングテストには文法や語彙などの能力判定の要素を含み、従来型のリーディング、ライティング、スピーキングテストは不要となる。この革命的な新しいテストは文教大学の入学試験として、または他大学へ有償で提供することも可能と思われる。そしてこのテストは英語クラスでのプレイスメントテストとしてや、在学中の学生の英語力の変化を調査する目的としても使うことができるものとなる。

結 論

多くの文教大学生、文教大学教職員にとって英語とは非日常的で難しいスキルと捉えられているが、私達の提案はそのような考えを徐々に払拭できる。そして私達の提案は、日本語と英語を自信を持って使うことのできる人材を育てることのできる教育機関のリーダーに文教大学湘南キャンパスを押し上げるだろう。

学生の中には私達が提案した英語能力の目標に簡単に到達してしまう者や、多くの助けなしでは不可能な者となるだろう。しかし、英語を学生のキャンパスライフの一部にしてしまうことにより、成功の大小はあるだろうが文教大学生すべてが僅かな努力により各々に応じた英語コミュニケーション能力の習得が可能となる。

私達の願いは文教大学湘南キャンパスが学生、教員、職員、近隣市民にとって役に立つ場所であって欲しいということである。現在ある英語クラスに加えてより効果的な英語コミュニケーション能力教育を提供することにより文教大学湘南キャンパスは湘南地域の英語教育における求心的役割を果た

すであろう。当キャンパスは他の教育機関との提携を模索している近隣の教育機関を惹きつけ、そしてカリキュラム外英語クラスや英語コミュニケーション能力学習環境が近隣の産業界や市民を大いに惹きつけるであろう。これが21世紀の大学に求められている姿なのではないであろうか。

フットノート

- (1) 文部科学省による財政支援策（「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」）総合的教育取組支援、「特色ある大学教育支援プログラム」に関する詳細は
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/needs.htmを参照
- (2) 「英語が使える日本人」の育成のための行動計画（平成15年3月31日）の詳細は<http://www.mext.go.jp/english/topics/03072801.htm>

Current Issues in English Education at Bunkyo University Shonan Campus

Masato Takahashi, Julian Bamford

Abstract

The current government initiative on English education has reached the stage of specific directives, including some for universities. We believe that the 2003 Ministry of Education Action Plan to Cultivate Japanese with English Abilities, and the 2004 Tokyo Forum on the same subject, can give guidance to those of us responsible for English education and the English ability of students at Bunkyo University. Part 1 of this article summarizes aspects of the 2003 Action Plan relevant to universities. Part 2 reports aspects of the 2004 Forum related to English skills desired by Japanese companies. Part 3 contains our suggestions for how the Ministry directives and employer needs might be successfully addressed at Bunkyo University Shonan Campus. (To reflect the conclusions of this article, it is presented here in both English and Japanese.)

“For children living in the 21st century, it is essential for them to acquire communication abilities in English as a common international language.” Toyama Atsuko, Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, March 31, 2003

Introduction: Can Bunkyo University be a Language Education Pioneer?

Times are changing. The modern world demands practical, communicative language ability and the Ministry of Education is working to meet this need. In truth, however, there is much uncertainty about how to reach the goal of Japanese with English abilities. For example, what does “practical” and “communicative” mean for English ability? It is clear to us that it does not mean the ability to slowly translate difficult written English into Japanese with the aid of a dictionary. It means the ability to express one’s thoughts in real time, in speech or writing, and to directly understand the spoken and written thoughts of others without having to use a bilingual dictionary.

Here at Bunkyo University Shonan Campus, we have a chance to be pioneers in university language education. Ministry research funds are available. (1) If we are able to transform our campus into an effective English learning environment, it will strengthen us as an educational institution and add to our campus identity. How can Bunkyo be a pioneer? In this article, we make some suggestions after looking at the Ministry of Education directives and the stated needs of employees for graduates with English ability.

Part 1: The 2003 MEXT* Action Plan to Cultivate Japanese with English Abilities, as applying to universities. (2)

[*MEXT = Ministry of Education, Culture, Sports, Science & Technology (Monkasho)]

The MEXT plan includes three aspects directly related to universities:

- I Target abilities for university graduates
- II University entrance requirements
- III Practical research into university English education

I Target Abilities for University Graduates

The plan calls for senior high school graduates who can communicate in English on topics relating to daily life. The attainment target is pre-second level or second level of the STEP test. University graduates should be able to use English in their work, but unlike senior high schools, no attainment target is specified. Each university should establish their own attainment targets.

II University Entrance Requirements

Universities should improve their evaluation systems for selecting applicants, bearing in mind that university entrance exams affect teaching methods and student motivation and desire for learning. Communication abilities, including listening and speaking, should be appropriately evaluated. The level of English required of applicants should be based on the attainment targets for English ability that have been established by the university.

Specifically, using listening tests or external proficiency examinations (STEP, TOEFL, TOEIC, University of Cambridge ESOL examinations) is encouraged for entrance examinations.

III Practical Research into University English Education

Practical research relating to English education at universities is being promoted, particularly concrete models for teaching work-related English. "Such models will deal with improvements to the contents of subjects, the structuring of a system for cooperation between universities, ways of training teachers, and other matters."

Of the three aspects of the Action Plan that are related to universities, the most basic is that universities must set their own attainment targets. The 2004 MEXT Forum, reported below, gave information that can help us do this for Bunkyo University Shonan Campus.

Part 2: The 2004 MEXT Japanese with English Abilities Forum, and its suggestions for university graduate attainment targets

On March 28th, 2004, MEXT held a one-day forum in Tokyo on Japanese with English Abilities. Concrete information was given about English ability expected by employers.

In his keynote address, Kotaro Kitashiro of IBM Japan talked about the English ability of IBM employees. For reading English-language documents or books, and for writing emails in English, English reading and writing proficiency are necessary. More than these, however, the ability to speak English fluently and express one's ideas is crucial. IBM Japan has begun using the TOEIC test as an entrance examination. The average score of applicants is 630 (34% over 630; 66% under 630).

Kitashiro made another interesting point. He noticed that his Chinese employees usually speak English better than Japanese employees. Asking them where they learned English, he was surprised when they said, "We learned English only in China. We've never been abroad to learn English."

Later, a panel of company representatives spoke about the English proficiency of university graduates. English is now the global language of business. The panelists stressed that all university graduates need English ability, even graduates of non-elite universities, who are less likely to work for global companies. This is because English is now an important asset even in non-global companies. If employees can't communicate in English, it can mean lost opportunities for a company.

Like IBM's Kitashiro, the panel suggested TOEIC as a preferred test of English, saying it is desirable for a university graduate to have a TOEIC score of 600. For someone wishing to work in an overseas branch, the TOEIC score should be 730.

The panel made one crucial qualification, however. They noted that graduates with adequate TOEIC scores tend not to be fluent or able to express their ideas in English. An ideal candidate for a company has both a sufficient TOEIC score AND equivalent fluency and confidence. For this reason, Fujitsu has added a speaking test, as TOEIC scores didn't measure how fluently an employee could speak English.

The conclusions to be drawn for university English education and its attainment targets are clear. English education must first of all develop oral fluency and confidence in students. A university like Bunkyo should aim for its graduates to have real English ability reflected by a TOEIC score of 600. The relatively few students aiming to work abroad or in global companies should aim for the ability shown by a score of 730. Kitashiro's comments about Chinese employees suggest that these results can be achieved without study abroad.

All this is helpful information when we set English achievement targets at Bunkyo University Shonan Campus, and makes plans to achieve them. This is the subject of Part III.

Part 3: English Learning at Bunkyo University Shonan Campus

Various conclusions can be drawn from the MEXT Action Plan and Forum. These are ours.

I We should think of English ability as skill, not knowledge.

MEXT calls for universities to prepare students to use English at work. As IBM's Kitashiro points out, this means, above all, the ability to speak English fluently and express one's ideas. We therefore think that Bunkyo's English classes should focus on these oral abilities. Only the few students aiming for higher-intermediate level should be taught the reading of English-language documents or books, and writing emails in English. The goal in such higher-level classes should be real-time proficiency in English reading and writing, not slow, dictionary-based English to Japanese translation.

To achieve practical oral communication ability, students need more than speaking and listening practice.

They need to master the basic 2000 English words and phrases necessary for expressing yourself and understanding others. Students should not learn words from vocabulary lists, however. They should meet and use the words in real communicative contexts in and out of the classroom, not only with native-speaking teachers, but with non-native-speaking teachers and other students. In this way, students acquire words naturally through using them, without the stress of memorization.

II We should decide suitable attainment targets.

MEXT calls for universities to decide their own attainment targets. Based upon the kinds of companies that Bunkyo students apply for, and the information given by the Forum panel of company representatives, we think that students graduating from Bunkyo should have an intermediate level of fluency and confidence reflected by a TOEIC score of 600. They should also have the option of taking this ability to the high-intermediate level reflected by a TOEIC 730 score.

These targets cannot be attained in a short time. Students and teachers should think of TOEIC 600 as a natural result of four years contact with English, during which students gradually master basic communicative ability.

III We should think of English ability, not test scores.

As the Forum company panel made clear, a TOEIC score isn't enough. The English ability reflected by that score is what companies need. We must therefore not 'teach the TOEIC' or encourage students to cram for higher scores. We and students must consider the test simply as a measure. Our classes should ONLY focus on real English communication and mastery of basic words. There should be no TOEIC preparation classes.

IV We should make English part of campus life, and research out-of-class learning.

English fluency with sufficient vocabulary takes hundreds of hours to develop, so students need to do more than go to English classes to become fluent. Students are also unique individuals, with different interests (computers; gaming; travel; TV; movies; music; sport; journalism; world events; fashion) and learning styles. To fit these realities, we think that the Shonan Campus should have a variety of facilities to encourage and help students to learn and practice English outside class.

When students arrive every day on campus, English should be there. It should seem omnipresent, available, and fun. There should be attractive English learning materials—books, tapes, classes, answers to questions—easily available, and easy to use. There should be counseling for students who want ideas for how to learn new words and practice their English. There should be places for students to go and practice speaking English with each other. Those places should be accessible and lively.

English should be one of the working languages of the campus. If the campus is a bilingual environment, with signs and instructions in both English and Japanese, students cannot fail to contact English or fail to acquire it. English will simply be out there, in the air, without bothering students. Students will, without thought or effort, be using, practicing, learning, and becoming comfortable with it.

MEXT encourages and supports research into effective practical English education. Until now, there has been little research into extracurricular opportunities for using and learning English. We suggest that Bunkyo applies for research grants in this area.

V We should reform English entrance examinations.

In line with Ministry recommendations, we should allow applicants to use a TOEIC, TOEIC or STEP test score as part of their application. We should avoid making judgments based on a simple score, however. Applicants who have taken these exams more than once should be encouraged to submit all their scores, as these would give us a more comprehensive picture of their English ability, improvement, and even enthusiasm. We should usually pay greater attention to the listening section score, which is a better test of communicative skill than the written section score. We should also consider giving applicants a speaking test, to discourage their cramming to increase test scores.

We also recommend that Bunkyo University does research into developing comprehensive listening tests. If they include items that test grammar and vocabulary, they would make reading, writing and speaking tests unnecessary. Such revolutionary tests could be used for entrance examinations—both at Bunkyo and sold to other universities. They could also be used as placement or progress tests by teachers in their university English classes.

Conclusion

At this time, English seems an exotic and difficult skill to most university students, staff and teachers. The suggestions in this article can gradually change that. They would also position Bunkyo as a leader in making a society whose members can use both Japanese and English with confidence. Some students will meet the new English expectations easily; other will need a lot of help. But all can succeed more or less, and with little effort, in making English a natural part of their lives.

It is our hope that the Shonan Campus serves students, teachers, staff and the wider local community. By adding effective English education to what the university presently offers, Bunkyo University would become a stronger magnet in the local area. The campus would attract local schools seeking educational partnerships, and local businesses and citizens eager to make use of the extra-curricular English facilities and environment. In this way, Bunkyo University Shonan Campus would become a truly 21st Century university.

Footnotes

- (1) For information on research grants, see the MEXT Gendaiteki Kyoiku Needs Torikumishien Program website (Japanese language)
<http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/needs.htm>
- (2) For the full text of the Action Plan in English, see <<http://www.mext.go.jp/english/topics/03072801.htm>>

